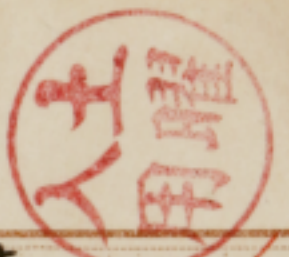


1524
五
話



日
蔭
子
供

日蔭の草と赤い小石

山家
賦

其²處は町端の鉄道線路の鉄橋の下に落ちた。
 広い鉄板の下に深い影を造つてゐます。その日
 の冷たい鉄板の影に沿つて、
 朝、太陽は斜らしい光を一面に
 投げかけます。線路土堤の草達は、一熱
 に頭を上げて斜らしい日を仰ぎます。か、
 か、下の蔭の草は、あ、お日様か今頃はあ
 鼻になつた頃とうとうと、そのしほくした顔
 を東のへへと向けてみよるのですか、暖かい日



差しは到底其²處まひはとひきません。午の太
 陽は高い空から残^借気もなく金粉を振りまきま
 す。草達は振仰いで、眼も口も鼻も一杯に揺
 て、強く光線を少しでも余計にと吸ひ込みます。
 知し可²哀さう、日蔭の草の上には重たい鉄板があ
 る(お)かりです。お方に成ると線路の西側の土
 堤は美しく、赤い水が流れます。草達は紅の水にぬ
 れるやうにキラキラとほしやいお喋りやを
 し、あから光の行水をするのです。か、蔭の草は
 赤い水が流れるやうな、あ、お喋りやをするば